

# 女川町・松葉板碑群の現況と予察

田 中 則 和

## 1 はじめに ― 経過と目的

2016年5月に情報を得て、急ぎ女川町の松葉板碑群（宮城県牡鹿郡女川町御前浜松葉39ほか）の発掘調査を見学させていただいた。というのは持論の南三陸町から石巻市に至る海岸線の入り江に連鎖状に立地する「南三陸海岸部板碑群」<sup>(1)</sup>の空白地帯がこのあたりであったことによる。すでに佐藤雄一氏の悉皆的調査による『女川町の板碑』（2001女川町教育委員会）がまとめられていただけに、新発見の驚きは大きかった。

その場所は東日本大震災に伴う復興道路（国道）建設予定地であり、一帯は美しい御前浜とともに津波の痕跡が未だ生々しく、失われてしまった集落の場所には巨大な防潮堤の工事が進められていた光景は忘れることができない。

浜に突き出した小山の裾には累々とした板碑が折り重なり、さらには傾きながらも立っている板碑は永仁五年（1297）という。驚くべきことにこの板碑群は平成25年の復興道路計画に伴う分布調査により発見されたとのことである。松葉板碑群の場合は発掘調査区域では年代が判明できる資料がなく、銘文の残るものが少ないが、全体としては鎌倉期から南北朝期であり、銘文のある板碑が相当数残っている。さらに現地には板碑から剥落したと思われる断片が多くあり、震災後、海側の森林が消失したことにより、急激に劣化しつつある本板碑群の現況を憂うとともに、地域住民への松葉板碑群の重要性を周知することの必要性を感じた。

そこで宮城県教育庁文化財保護課に相談したところ、女川町教育委員会生涯学習課に連絡をとっていただき、女川町教



第1図 御前浜の遺跡（●新国道に伴う発掘調査地点「宮城県遺跡地図」（宮城県教育庁文化財保護課2017.12に加筆）

<sup>(1)</sup> 従来は単に「海岸部板碑群」とか「入江の板碑群」としてきたが、南三陸（三陸南部）のリアス海岸の主要な入り江に特徴があるので「南三陸海岸部板碑群」とした。田中則和「南三陸町域における板碑・城館の概要」『宮城考古学 第19号』2017 宮城県考古学会

育委員会より土地所有者より現況調査の許可をとっていただいて現況調査を開始することができた。まもなく道路建設工事が始まり、落石などで松葉板碑群が損傷の危機となった際も女川町教育委員会では保護に迅速に対処しており、震災復興における歴史遺産保護活用の意義を踏まえたものとして高く評価したい。この間、阿部栄喜区長には種々のアドバイスをいただいたことに深く感謝したい。2017年3月には発掘調査報告書<sup>(2)</sup>が刊行され、女川町域における本板碑群の位置付けも「総括」によりきちんとなされている。本稿は、この報告書の成果を踏まえつつ、発掘調査域外の板碑の観察によって本板碑群の内容をより明らかとし、災害や戦乱を生き抜いた郷土の先人の遺跡として保護され、東日本大震災後のまちづくりへの寄与・活用を願うことを目的とするものである。

## 2 立地と歴史的環境

御前湾の奥にある御前浜には丘陵が三方から伸びており、突端部はいずれも遺跡として登録されている。北から田の入遺跡（平安時代）、田の島遺跡（平安時代）そして、浜の南部にあり、浜からは小山のように見えるその南西斜面の標高約8～16mに立地しているのが松葉板碑群である。なお、東日本大震災津波は板碑群下端近く（標高8m付近<sup>(3)</sup>）まで達している。板碑群の分布する範囲は東西約35m、南北約30mである。斜面は35度前後の傾斜であるが、板碑群は小平場を造成して造立している（後述）。御前浜、尾浦、桐ヶ崎、女川湾などの主要な入り江は御殿峠（標高約250m）を介して結ばれているが、御前浜からの道は松葉板碑群に向かって右脇（北側）から登っていく。また、板碑群のほぼ中央に尾根に向かう小道があるが、尾根道はこの道に合流するようである。御殿峠付近には、羽黒社跡地がある。『女川町史』（1960）によれば、石巻市雄勝町大浜千葉氏伝来の市明院関係記録に「元久二年（1205）、出羽の羽黒山より辞令があつて北は針岡より南は桐ヶ崎以東の瀬祭幣切り等をせよ。なお、尾浦羽黒宮創建遷宮は次の通り行え（後略）」とある。鎌倉時代に御前浜を含む追波川河口の針岡から女川湾北岸の桐ヶ崎までの漁業に関わる祭祀儀式を羽黒派修験が差配している可能性を示唆している。市明院は石峯山修験として延徳二年（1490）開山<sup>(4)</sup>とされているが薬師堂は鎌倉時代創建とされている。また、現在、尾浦に所在する保福寺もまた護天（殿）峠にあったとつたえられており<sup>(5)</sup>、女川の要地を結ぶ結節点が中世には重要な場所であったことが窺える。そこに至る道の入口付近に松葉板碑群が存在することは、造立主体の武士の屋敷もまた付近にある可能性を示唆する。『松

<sup>(2)</sup> 古田和誠『松葉板碑群ほか』2017 女川町教育委員会 この報告書に限らず宮城県内市町村発行の報告書類の「全国遺跡報告総覧HP（奈良文化財研究所）での公開を望む。

<sup>(3)</sup> 地元民の証言及びGoogleアース検索により津波痕跡と標高を対照。

<sup>(4)</sup> 「大浜」『宮城県の地名』1987 平凡社

<sup>(5)</sup> 三宅宗議『照源寺の創建とその時代』1992 照源寺

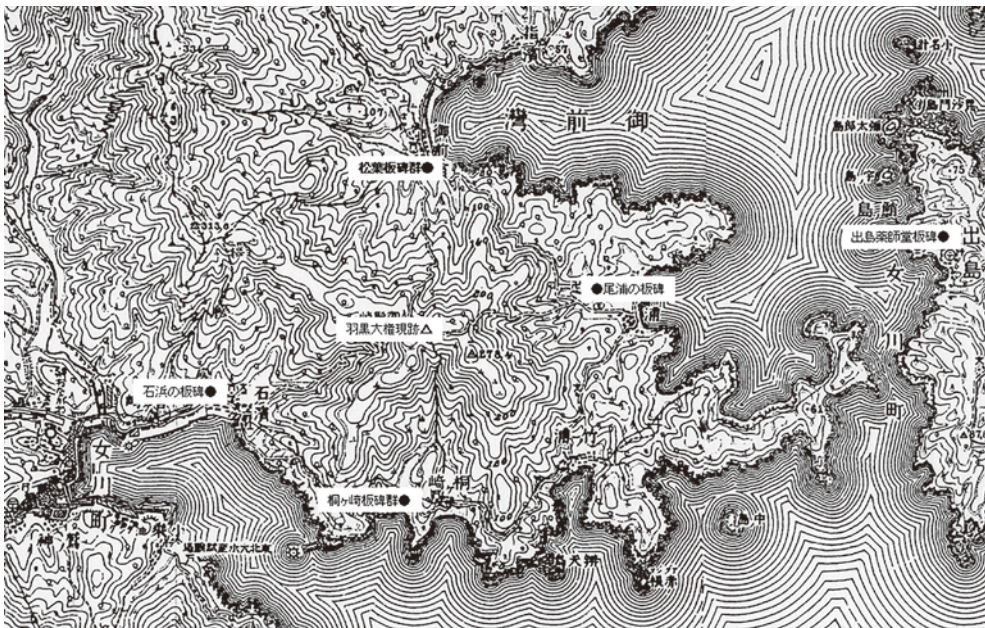




第2図 松葉板碑群背後の山上から御前浜・御前湾を望む (2016.6.12)



第3図 景観パノラマ 左：熊野神社と館跡推定地 右：発掘調査風景 (2016.5.16)



第4図 周辺の板碑の位置 (『女川町誌』(1960) 所収地図をベースとした)



第5図 松葉板碑群パノラマ 中央に永仁五年銘板碑が立つ 2016.6.12

葉板碑群ほか』発掘調査報告書（2017）において、古田和誠氏が松葉板碑群造立者である武士の居館を松葉板碑群の北方約80mの熊野神社のある独立丘陵状地形の可能性を指摘している。筆者はここを踏査し、室町時代、戦国時代のような土塁、空堀の顕在は見られないものの約8,000m<sup>2</sup>の広大な平坦面、海際にありながらと東日本大震災津波も及ばなかった標高21m、周囲が急傾斜面であることの防御性からその可能性は十分あると考える。本板碑群から最も近い板碑群<sup>(6)</sup>は南西約2,700mの桐ヶ崎小白浜（小城浜）板碑群である。正応六年（1293）から永和五年（1379）の紀年銘板碑を含む8基の板碑群である。佐藤雄一（2001）報告では多くの板碑が海岸から数十mの方形塚上にまとめられていたとする。筆者の踏査では小白浜の西側斜面に立つ2基の板碑は小平場を伴っておりこの一帯が原位置と考えられる。

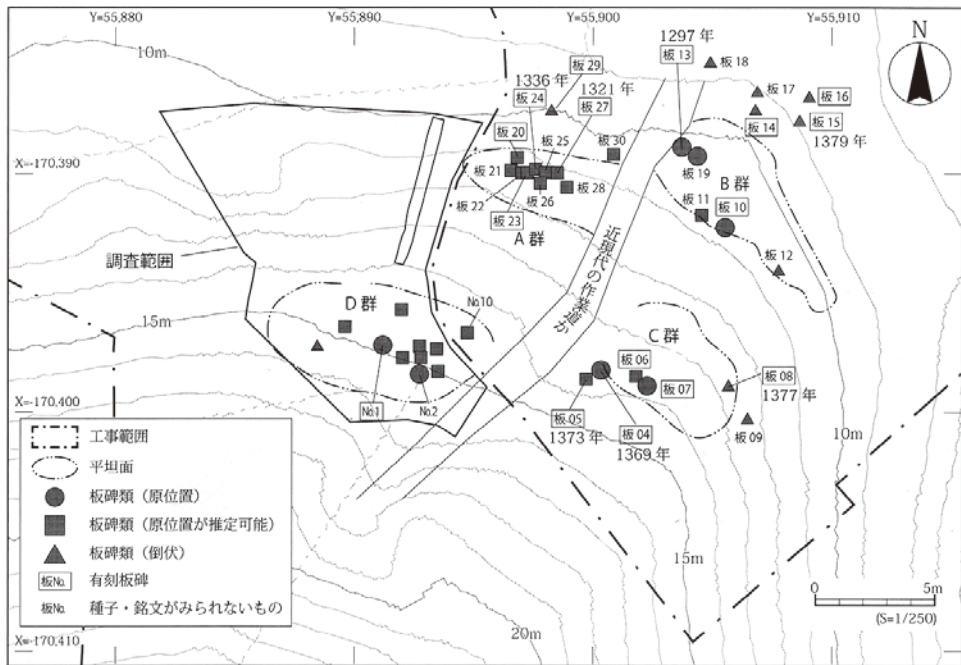
<sup>(6)</sup> 松葉板碑群の南西約1,700mの尾浦では佐藤雄一（2001）の調査では発見できなかったが、『風土記書出』『女川町誌』で複数の板碑が報告されており板碑群が存在した可能性が高い。



### 3 御前浜復興道路事前発掘調査（2016）の概要

2017年3月に刊行された『松葉板碑群ほか』（女川町教育委員会）により調査成果の概要を記す。発掘調査期間は5月9日～20日。調査面積は約122㎡である。

(1) 4ヶ所の平場を中心に約40基の板碑が分布する。(2) 道路建設範囲にある原位置に立つ板碑2基、倒伏した板碑1基と集石の見られる最上段の平場(東西8.2m、南北4.2m)を発掘調査し、確認した11基の板碑のうち9基の原位置が判明した。(3) 西側の板碑群から東側の板碑群への2時期の変遷があり、当初の板碑群は掘り込み整地や区画溝により構築され、埋葬遺構を伴っている可能性がある。(4) 調査個所の板碑には紀年銘のあるものがなかったが周辺の板碑から時期は14世紀後半から15世紀と推定される。(5) 板碑群の造立は13世紀末に開始されており、主体は御前湾周辺を治めた有力武士と推定され、近親者の追善供養を目的として造立されたと考えられる。各板碑については第61図に今回の現況調査分とともにまとめた。



第6図 松葉板碑群の板碑類の分布（『松葉板碑群ほか』2017より）

#### 4 現況調査の方法



第7図 松葉板碑群全体オルソフォト（上図は上から 下図は北から任意 2017.4 ※復興道路予定地を除く）

現況調査は、板碑ごとに観察カードを作成し、必要に応じて拓本をとった。また、全体的な正確な位置関係を把握する必要があるが、測量体制と資力を持たないこと及び立体的な記録を残すため写真から agisoft photoscan と Cloud Compare によりオルソフォト（ゆがみを修正した写真）を作成した<sup>(7)</sup>。また、A 群の平場のように錯綜した板碑の重なりや有効と考えられる場合に板碑のオルソフォトも作成した。この技術習得に際しては九州文化

<sup>(7)</sup> 全体オルソフォトについては約 400 枚の多方向からの写真から agisoft photoscan でオルソフォトを作成し、Cloud Compare でスケールを入れた。



財計測集団 (CMAQ) 代表の永見秀徳氏より懇切なご指導をいただいたことに感謝したい。  
 現況調査は2016年5月19・28日、6月5・12・19・26日、7月10・18・24・31日 2017  
 年4月5・7・13・15日、補足調査(計測・観察)12月15・17・24日の計17日間である。

## 5 松葉板碑群の現況



第8図 松葉板碑群オルソフォト (2017.4撮影データによる)

発掘調査地の原位置と推定される板碑3基の次からNo. をふっている。今回板碑と認めたのは板碑はNo. 10、11を一個体として38基。これに発掘調査した11基を加えると49基となる。しかし、板碑の可能性あるものが数か所あり、総数50基を越えると推定される。さらに立位のもので小型板碑と断定しなかったものが2基ある(後述)。断片はさらに10数片確認されるが板碑の可能性が高いもののみ対象とした。板碑群の中のまとまりであるA.B.C.D群は報告書に基づき、その由来する平場をA.B.C.D平場とした。A.B.C.D群はほぼ原位置をa、ずり落ちた結果と推定されるものをbとして細分した(第8図上図)。Ba群の最古の板碑No. 13と10付近は原位置だが、近世墓により斜面下に落下したのがBb群と考えられる。A群列状部は原位置だが、Ab群は斜面下にずり落ちたものと考えられる。C群はほぼ原位置だが、Cb群は東斜面にずり落ちたものと考えられる。なお、以下の各板碑の記述にあたっては、紙数節約のため観察カード記述的に表現している。また、文中で「倒伏」とは、ほぼ原位置で倒れたと推定される状況について使用している。

**板碑 No. 4 (C 群)**

年代：応安二年(1369  
北朝)

確認状況：立位

原位置

完形 現状

最高位

石材：粘板岩

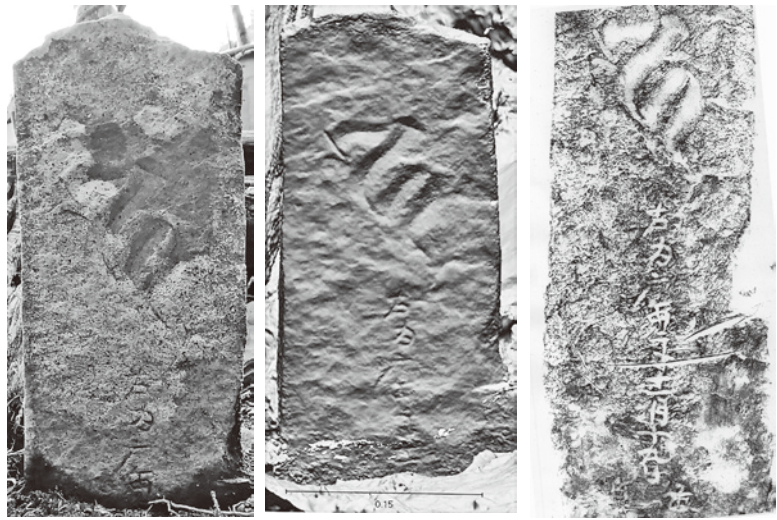
形態：頭部三角不整  
アーチ形、両側  
辺は垂直に近い。

種子：カ(地藏菩薩)

彫法：薬研彫

銘文：種子の下中央部  
に「右為応安二年」

寸法：地上高：37.0 幅16.5 厚さ6.5 cm



第9図 No. 4 a 写真 b オルソフォトソリッド c 拓本



板碑 No. 5 (C 群)

年代：応安六年（1373 北朝）

確認状況：横位 ほぼ原位置 ほぼ完形

石材：粘板岩

形態：頭部平坦、側辺垂直ほぼ平行

種子：キリーク（阿弥陀如来）

Ra 部に空点状の彫りが見られるのは特異である。彫法：薬研彫

銘文：「右志者为過去霊/ 應安六年卯月/ 七年忌塔婆故也」の二行三行の間の下部に「敬白」

石材：粘板岩

寸法：確認長：70.0 幅 23.5 厚さ 6.0 cm

右側辺は細かな剥離加工により直線的に整形されている。



第 10 図 No. 5 a オルソフォトソリッド b 拓本

板碑 No. 6 (C 群)

年代：不明

確認状況：斜位（ほぼ原位置） 碑面の大部分が剥落

形態：頭部は偏三角形、左辺垂直、右辺末広がり

種子：剥落、バンの可能性

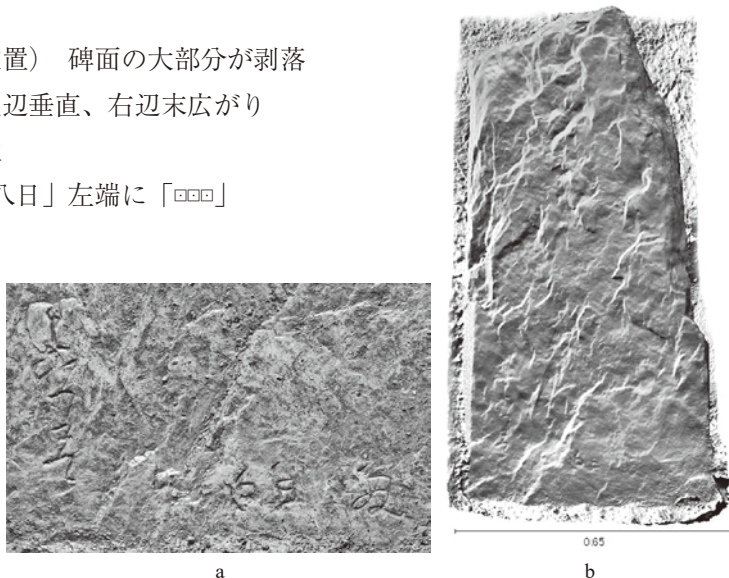
銘文：最下辺に「敬白」「八日」左端に「□□□」

石材：粘板岩

寸法：確認長：110.0

幅 57.0

厚さ 8.5 cm



第 11 図 No. 6 a 銘文残存部オルソフォト b オルソフォトソリッド

**板碑 No. 7 (C 群)**

年代：不明

確認状況：立位、全面剥落

形態：尖塔形

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：地上高：101.0 幅 34.5 厚さ 12.0 cm



第12図 No. 7 倒れているのがNo. 6

**板碑 No. 8 (Cb 群)**

年代：永和三年（1377 北朝）

確認状況：横位（東斜面）、剥落顕著（銘文の上下欠損）

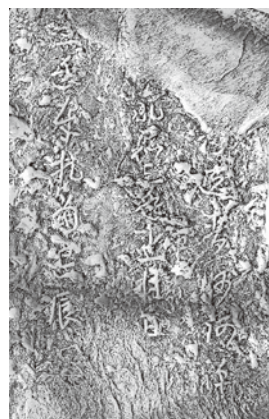
種子：剥落

形態：短冊形（頭部完形か不明）

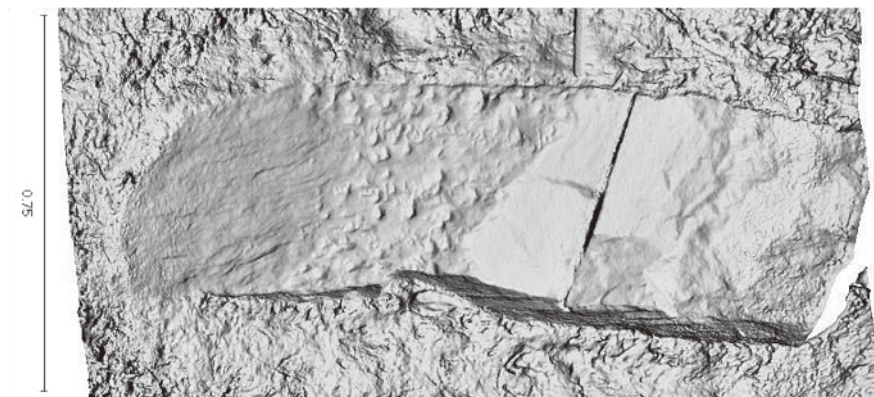
銘文：「右志者妙阿禪□/ 永和三年十一月日/ 三年奉相當忌辰」

石材：粘板岩

寸法：残存長：150.0 幅 44.3 厚さ 4.5 cm



第13図 No. 8 拓本



第14図 No. 8 オルソフォトソリッド



### No. 9 板碑 (Cb 群)

年代：不明

確認状況：横位（東斜面）

ほぼ完形か 表面のみ露出

形態：不整楕円形

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：116.0

幅 36.0 cm 厚さ不明



第 15 図 No. 9

### 板碑 No. 10・11 (Ba 群)

板碑 No. 10 と No. 11 は形態不明確だが石質、銘文構成などから同一個体と考えられるので並立表記する。No. 10 は最古の板碑 No. 13 の南東約 4.5 m の同一平場にかろうじて立っている。その前方（斜面下）に No. 10 に由来すると考えられる多数の断片があり、その中に No. 11 三分割の状態を確認された。

#### 板碑 No. 10 年代：不明

確認状況：立位、上方・右方欠落

種子：不明（板碑上部欠損）

銘文：

「オンバンウンタラクキリクアク  
/右志者（為）□□□□」

真言：五大虚空蔵真言

石材：粘板岩

残存長：103.0 幅 26.0～ 厚さ 29.0 m

#### 板碑 No. 11 年代：不明

・確認状況：横位、上方、左方欠落

・銘文：

「西/(出) 離生死往生極（楽）□也/  
オンアビラウンケン」「敬白」

・真言：胎藏大日真言（大日報身真言）

・石材：粘板岩

・残存長：91.1 幅 25.5～ 厚さ 7.5 cm

No. 10.11 は隙間も考慮すると幅 65 cm 以上あり、紀年銘を挟んで、右端に五大虚空蔵真言、左端に大日如来真言を配しその間に達筆な願文を配した板碑と考えられる。板碑の復元と評価については後述する。



第16図 右No. 10 左No. 11 拓本写真

**板碑 No. 12 (B群)**

年代：不明

確認状況：横位（斜面）、表裏不明

No. 39 板碑に隣接し、  
40、41 板碑の上ののる。

形態：不整長方形

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：94.5 幅 74.0

厚さ 5.5 cm



第17図 No. 12



板碑 No. 13 (Ba 群)

年代：永仁五年（1297）本板碑群最古

確認状況：立位（斜位）剥落進む ほぼ完形

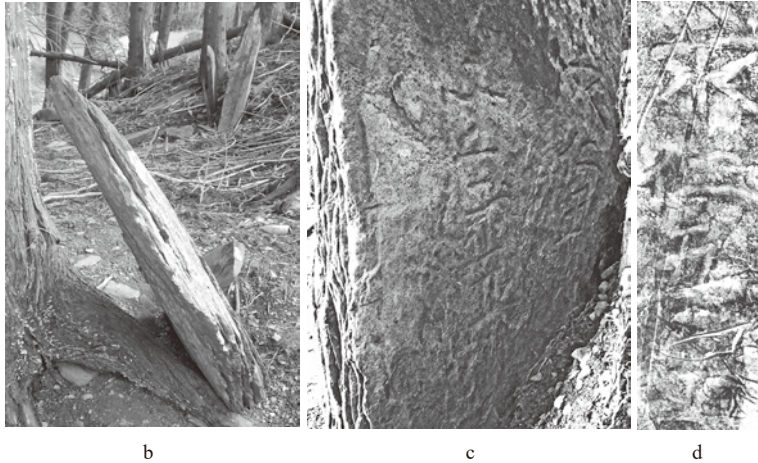
形態：頭部は偏アーチ形、板状

種子：アークか（胎藏界大日如来か）

銘文：「永仁五年/ 聖霊」

石材：粘板岩

寸法：地上高：103.0 幅 45.0 厚さ 10.0 cm



a

第 18 図 No. 13  
a オルソフォト  
b 横  
c 「聖霊」部  
d 「永仁五年」拓本

板碑 No. 14 (Bb 群)

年代：不明

確認状況：横位（斜面）、表裏不明

形態：不整長方形

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：83.5

幅 37.0 厚さ 5.0 cm～



第 19 図 No. 14

**板碑 No. 15 (Bb 群)**

年代：康暦元年（1379 北朝）

確認状況：B 平場からずり落ちか

横位（斜面） ほぼ完形

形態：不整長方形

種子：バン（金剛界大日如来）

銘文：「右志者/ 康暦元年 未己/ 出離生死」

石材：粘板岩

寸法：残存長：154.0 幅 53.5 厚さ 10.5 cm

右側辺は細かな剥離加工により直線的に整形。



第20図 No. 15

**板碑 No. 16 (Bb 群)**

年代：不明

確認状況：頭部を斜面下に横位、剥落が進む

ほぼ完形か

形態：頭部は尖頭、全体としては弧状 ほぼ完形。

種子：キリーク（阿弥陀如来）薬研彫、浅い

銘文：不明

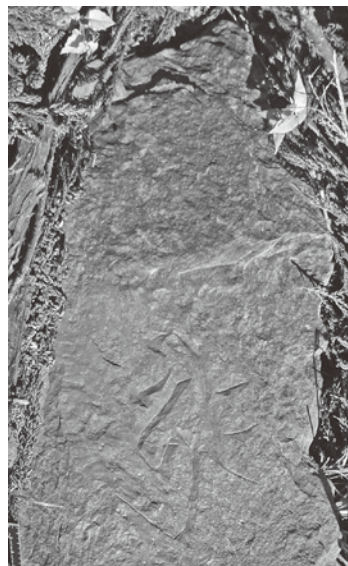
石材：粘板岩

寸法：残存長：150.1 幅 41.0 厚さ 7.0 cm

No. 15 同様 B 平場からずり落ちたとみられる。



第21図 上 No. 15、下 No. 16



第22図 No. 16



**板碑 No. 17 (Bb 群)**

年代：「貞治」(1362～1368) の可能性

確認状況：横位（斜面）、碑面剥落多、ほぼ完形  
形態：頭部は不整尖頭形、全体として不整楕円形

種子：バン（金剛界大日如来）

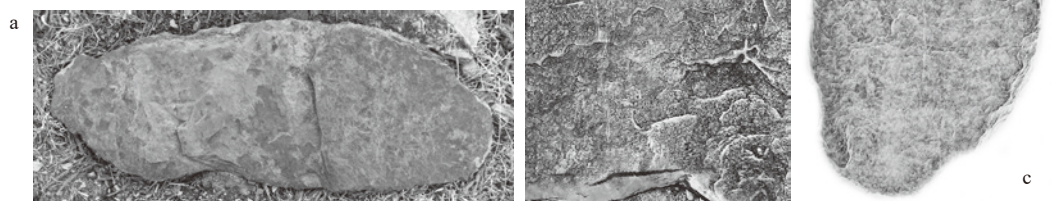
銘文：右端行に「為」、種子下に「貞□」

□は「治」か<sup>(8)</sup>

石材：粘板岩

寸法：確認長：95.0 幅 35.0 厚さ 2.5 cm

右側側辺は連続剥離加工で整形。



第 23 図 No. 17 a 写真 b 銘文拓本 c 拓本

**板碑 No. 18 (Bb 群)**

年代：不明

確認状況：横位（斜面）、全体剥落、表裏不明

形態：不明

種子：不明

銘文：不明（剥落の可能性）

石材：粘板岩

寸法：確認長：86.0 幅 48.0 厚さ 6.0 cm



第 24 図 No. 18

**板碑 No. 19 (B 群)**

年代：不明

確認状況：立位 碑面剥落か

形態：頭部平坦、板状

種子・銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：地上高：20.5 幅 16.0 厚さ 7.5 cm

本板碑群中では極端に小型（剥落・欠損の結果の可能性もある）。



第 25 図 No. 19

<sup>(8)</sup> 野口達郎氏ご教示。

板碑 No. 20 (A 群)

年代：不明

確認状況：横位（工事後、斜面  
下に移動（第8図上  
図）参照）

ほぼ完形

形態：頭部不整ドーム形、全体  
は弧状

種子：バク（釈迦如来）

銘文：「右志者/過去慈父/幽霊  
往生/極楽也」

石材：粘板岩

寸法：残存長：165.0 幅63.0  
厚さ11.5 cm



第26図 No. 20 左写真 右拓本

板碑 No. 21 (A 群)

2016年9月25日現地に赴いたところ隣接して側溝工事がされており、No. 20の下にあった板碑 No. 21 が側溝工事で足下の土が移動し、側溝に落下の可能性があるので女川町教委に連絡、教委により後、現位置に移動（第8図上図参照）。

年代：不明

確認状況：横位（斜面）、剥落が顕著 表裏不明 完形か

形態：尖頭形、板状

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：181.0 幅37.0 厚さ5.5 cm  
全長が判明するものとしては本板碑群最長。



第27図 No. 21





第 28 図 A 群 (2016.6.26 上方から) 左端から No. 21 (工事後移動前)、20 (工事後移動前) 22.23.26、右端 28

**板碑 No. 22 (A 群)**

年代：不明

確認状況：側辺が露出

形態：頭部破損

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：76.0～ 幅 19 以上 厚さ 7.0 cm



第 29 図 No. 22

**板碑 No. 23 (A 群)**

年代：不明

確認状況：倒伏、碑面は下面

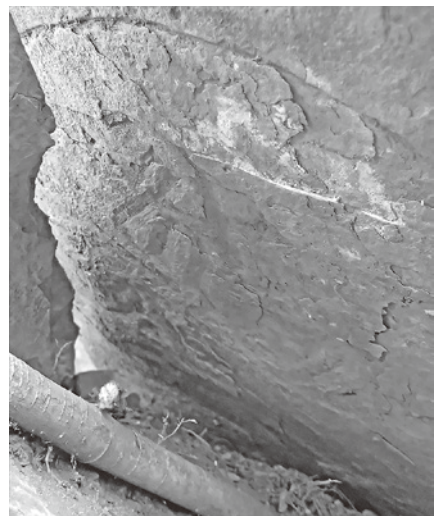
形態：頭部破損 板状

種子：月輪内に阿弥陀三尊種子か

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：83.0～ 幅 36.5 厚さ 9.0 cm



第 30 図 No. 23 (下面・碑面)



板碑 No. 24 (A 群)

年代：建武三年（1336）

確認状況：碑面が上になっているが、周囲を板碑に挟まれているせいか、保存が良い。

完形に近い。

形態：頭部は平坦に整形され、側辺は直線の

種子：バン（金剛界大日如来）薬研彫

空点が荘厳点と接続して渦巻状

銘文：「右志者為過去聖霊/建武三年四月日敬白/出離生死往生極楽也」

石材：粘板岩

寸法：確認長：90.0 幅39.0 厚さ10 cm 前後



第31図 右上：拓本写真  
右下：種子部写真（強調処理） 左：現状





**板碑 No. 25 (A 群)**

年代：不明

確認状況：No. 26 の下に棒状の  
No. 33 があり、その下に  
倒伏（斜面）

ほぼ完形 表裏不明

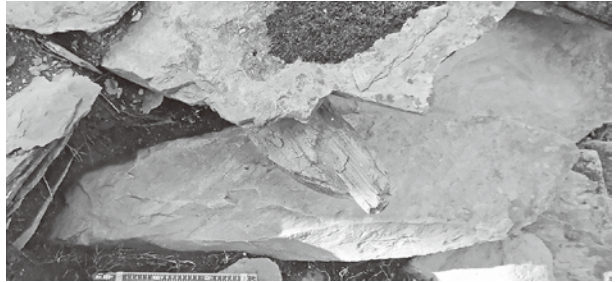
形態：不明

種子：不明（剥落の可能性）

銘文：不明（剥落の可能性）

石材：粘板岩

寸法：確認長：120.5 幅 24.0 厚さ 10.5 cm



第 32 図 No. 25

**板碑 No. 26 (A 群)**

年代：不明

確認状況：倒伏（斜面）、頭部破損  
碑面は下面（剥落多）

形態：不明

種子：不明（剥落）

荘厳：月輪

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：78.0 以上 幅 49.0 厚さ 6.5 cm



第 33 図 No. 26 上面



第 34 図 No. 26 下面（碑面・月輪）

**板碑 No. 27 (A 群)**

年代：元亨元年 (1321)

確認状況：移動しているが、上方に割面が見え、原位置に近い。

横位 剥落が進んでいる。

形態：頭部は不整ドーム形でしだいに末広がりとなる。

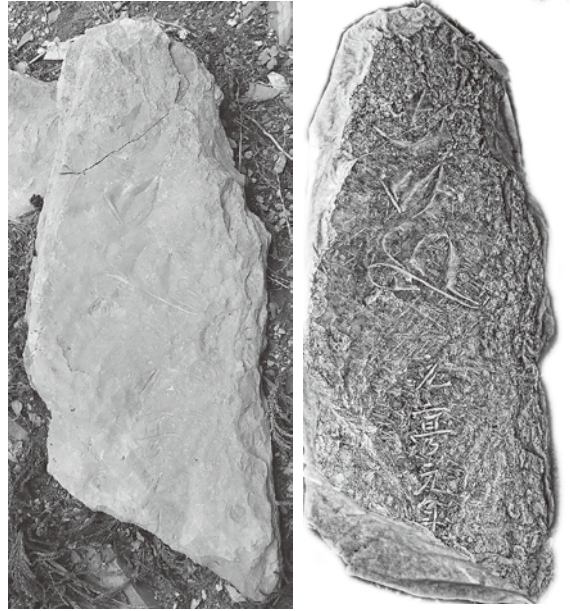
種子：ウーン 葉研彫 (浅い)

(阿闍如来、金剛薩埵、金剛夜叉、愛染明王、馬頭観音ほか)

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：残存長 94.9 幅 37.0 厚さ 5.0 cm  
右側辺は剥離加工で整形している。碑面には交差する条痕が多数認められ、碑面整形の痕跡と推定される。



第35図 No. 27 左 写真 右 拓本

**板碑 No. 28 (A 群)**

年代：不明

確認状況：基部のみ、二か所に断裂し、さらに裂けている。上部に新しい破損あり (工事落石)。

形態：不明

種子：不明

銘文：不明 石材：粘板岩

寸法：地上残存高：51 幅 20.0+21.0 厚さ 10 cm



第36図 No. 28 左：東から 右：北から



板碑 No. 29 (A 群)

年代：不明

確認状況：A 群重なるの最下部

碑面上、上部破損、中部剥落

形態：不明

種子：不明

銘文：下部に「往生極楽也」

石材：粘板岩

寸法：確認長：69.0 以上 確認幅 34

厚さ 21.5 cm

右側辺は連続剥離加工により直線的に整形



第 37 図 No. 29

上：銘文拓本写真 右上：上から  
右下：重なりのおようす

No. 29 の上に重なり別の板碑の基部の可能性がある板状の石があるが、No. 29 の中部剥落断片が刺さっている可能性もあり、板碑番号は付けていない。さらにその上に板碑とは断定できない小形楕円形状の平たい石がのっている。重なりあっているが No. 23、26 と異なり碑面が上なので、単純に倒伏したものではなく No. 24 と同様、碑面が上になっている。

板碑 No. 30 (Ab 群)

年代：不明

確認状況：横位 碑面剥落多い 完形に近いか

A 群 No. 23 の一月輪阿弥陀三尊種子に  
近似していることと位置からみて A 平  
場より落下と推定。

形態：頭部は平坦に近い板状だが右下部は細くな  
る。

種子：阿弥陀三尊 薬研彫（浅い）

（阿弥陀如来の種子の下、左脇侍の観音菩薩、  
右脇侍の勢至菩薩の種子を配する）

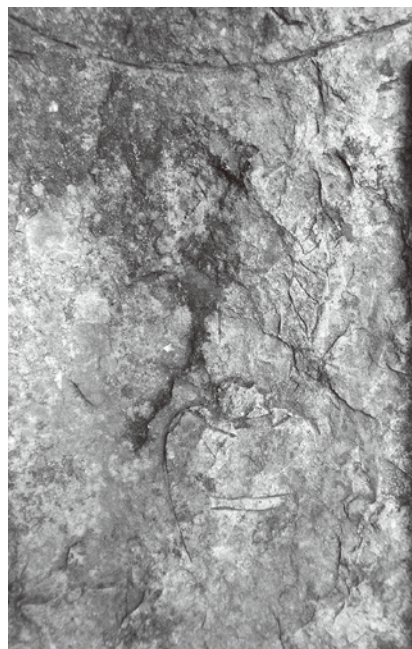
銘文：不明（剥落か）

荘嚴：月輪 花瓶（供花の一部残存）

石材：粘板岩

寸法：確認長：148.5 幅 42.5 厚さ 5.0 cm

右側辺剥離加工で整形  
左側辺は節理面か



第 38 図 No. 30 上右：拓本 右下：花瓶・供花 左：写真



**板碑 No. 31 (Ab 群)**

年代：不明

確認状況：A 平場から脱落か。

横位（斜面）、表裏不明 完形

形態：板状

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：115～ 幅 61.0

厚さ 13 cm～



第 39 図 No. 31

**板碑 No. 32 (A 群)**

年代：不明

確認状況：横位（斜面）、表裏不明、

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：63.0 幅 41.0 厚さ 3.4 cm



第 40 図 No. 32

**板碑 No. 33 (A 群)**

年代：不明

確認状況：No. 25 の下 倒伏（斜面）、表裏不明

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：

確認長：76～

幅 13.5

厚さ 7.5 cm



第 41 図 No. 33



第42図 左より板碑 No. 27 の下部に横方向に No. 34 No. 34 の斜面側下に No. 35

**板碑 No. 34 (A 群)**

年代：不明

確認状況：No. 27 の下部に東西方向に横位（位置は動いているがA 平場由来か）

表裏不明

形態：板状

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：90.0 幅 31.0 厚さ 2.5 cm

**板碑 No. 35 (A 群)**

年代：不明

確認状況：倒伏（斜面）、表裏不明、自然面

形態：板状

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長：43～ 幅 27.0 厚さ 3.5 cm



**板碑 No. 36 (A 群)**

年代：不明

確認状況：A 平場最上方に基部のみ  
表裏不明

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：地上高 8 以上 残存幅 20 厚さ 2 cm



第 43 図 No. 36

**板碑 No. 37 (A 群)**

年代：不明

確認状況：山側の No. 26 と倒伏  
列中の No. 36 との間  
に基部のみ（立位）  
二分裂 表裏不明

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：地上高 33～ 幅 31  
厚さ 2 cm



第 44 図 左より板碑 No. 26、No. 37 No. 38（三分裂） 左手前  
No. 36

**板碑 No. 38 (A 群)**

年代：不明

確認状況：A 群 倒伏列  
No. 37 の南に隣接して  
基部のみ（三分裂）

形態・種子・銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：地上高 26～ 幅 62  
厚さ 5 cm



第 45 図 No. 38（三分裂）

なお、山側付近には板碑基部状の断裂した板碑が顔を出しているが判別困難のため番号は  
ふっていない。

**板碑 No. 39 (B群)**

年代：不明

確認状況：No. 12 の左上方（山側） 横位

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長 15～ 幅 22～ 厚さ 2.5 cm



第46図 左より No. 39、No. 40、No. 12、No. 41

**板碑 No. 40 (B群)**

年代：不明

確認状況：No. 12 の西側下部 横位

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長 32～ 幅 11～ 厚さ不明

**板碑 No. 41 (B群)**

年代：不明

確認状況：No. 12 の東側下部 横位

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認長 25～ 幅 22～ 厚さ 4.8 cm



第47図 No. 12 と下部の No. 41

**板碑 No. 42 (C群)**

年代：不明

確認状況：No. 6 の西側 板碑片

形態：不明

種子：不明

銘文：不明

石材：粘板岩

寸法：確認 36～・40～ 厚さ 1 cm



第48図 No. 42

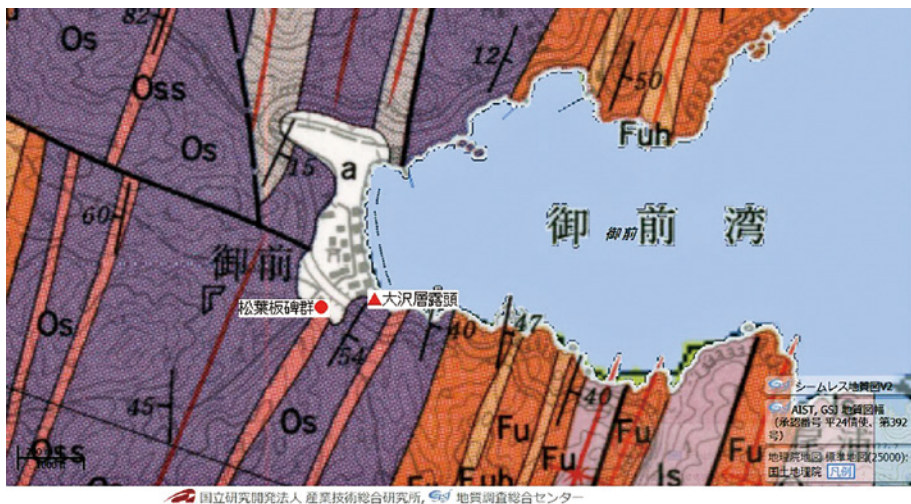


## 6 板碑の石材と採取地について

松葉板碑群の石材はどこから供給されたのであろうか。第49図のような新鮮な石面の持つ特徴は周辺を踏査してみると約300m東方の海岸崖面に大沢層の露頭があり、松葉板碑群の石材と比較したところ写真のように酷似していることが分かった。最も近いところではこのように近接した供給地が考えられる。



第49図 板碑の石材 (No.10 とその剥落)



第50図 周辺の大沢層露頭位置 (産総研5万分の1地質図幅「志津川」<https://gbank.gsj.jp/geonavi/>をベースに作成)



第51図 御前浜の大沢層露頭



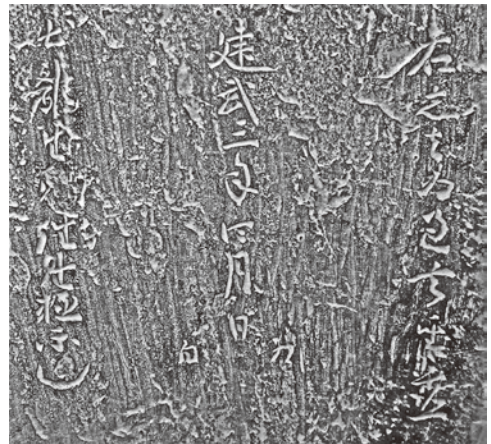
7 検討

(1) 板碑 No. 10、11 の理解について



第52図 No. 10 (右)、11 (左) の配置復元 (拓本)

板碑 No. 10、11 については現況、石質、銘文の筆体などから同一個体と考え、銘文部分を構成と石肌から上図のように配置してみた。基本的な配置は左右に真言、その間に右左に願文を配し、「酉」字の存在から中央に紀年銘が刻まれていたと考えた。本板碑群では建武三年（1336）板碑以上の達筆であり、その願文後半の「出離生死往生極楽也」と共通するので前文もその「右志者為過去聖霊」も近似していると考えられる。位置は本板碑群の最古の永仁五年（1297）と同じ Ba 平場に造立されている。永仁五年（1297）板碑の銘文の「聖霊」は達筆と言いが難いが、風化が激しく厳密な比較は困難である。そして本板碑群の応安二年（1369）以降の略字化した銘文とは全く異なる。以上からすれば一定の願文の共通性も考慮し、仮に「達筆」が古手であり、南北朝期にしないで字体の簡略化に向かうとすれば、鎌倉後期から南北朝初期の年代の可能性もある。この間で十二支の「酉」



第53図 板碑 No. 24 の銘文



が入るのは、永仁五年丁酉（1297）、延慶二年己酉（1309）、元亨元年辛酉（1321）、正慶二年癸酉（1333）、貞和元年乙酉（1345）、延文二年丁酉（1357）である。No. 10 板碑の前面には多数の板碑細片が重なっていると推定され、確認調査がされれば紀年銘部分の板碑断片などが発見され正確な板碑の全体像が判明することが期待される。

本板碑の特徴は、銘文の右に「オンバンウンタラクキリクアク」の五大虚空蔵真言、左に「オンアピラウンケン」の大日報身真言（胎蔵大日真言）<sup>(9)</sup>を配する点にある。このような真言の組み合わせ例は管見では女川町のみならず周辺の石巻市域では見出すことができない。ただし石巻市吉野町多福院応永7年（1400）銘板碑はバンウンタラクキリクアク（金剛界五仏）とケンウンラピア（大日報身真言）、ケンカンランバンア（大日法身真言）の組み合わせであり、讃嘆句の種子オンがないものの近似している。また、「バンウンタラクキリクアク」を碑面の左右に配した例は石巻市牛田如来応永二十九年（1422）銘板碑にある。これは同地にある「キャカラバア」を左右に配した応永廿年（1413）銘板碑の流れとして理解されている<sup>(10)</sup>。「オン」に着目すれば、早い例として石巻市三輪田の正和四年（1315）銘「オンアピラウンケン」板碑が知られるが、これは右端一行で、左端には願文が配されている。左右真言配置の板碑が比較的まとまって見られるのが石巻市尾崎の海蔵庵板碑群<sup>(11)</sup>である。ここでは貞和四年（1348）と貞和五年（1349）例があり、種子下中央に紀年銘が刻まれるが、左右の真言はいずれもアピラウンケンのみである。左右に別々の真言を配する例としては石巻市高木観音堂応安8年（1375）銘板碑がアピラウンケン（大日法身真言）を右端、アバンランカン（大日報身真言）を左端の組み合わせ、石巻市相野谷源光寺の康正二年（1456）銘板碑がアピラウンケンを右端に、キャカラバア（五大の種子）を左端に配する例がある。石巻市皿貝の寛正七年（1466）・文明二年（1470）銘板碑も同様の構成をとっている。この他、石巻市北上町十三浜では15世紀前半に「キャカラバア」（五大の種子）、「アラハシヤナウ」（大日応身真言）など真言の左右配置、紀年銘中央タイプの板碑が相当数存在する。総じて北上川下流域旧河北町域を主体とした14世紀前葉の大日如来真言を伴う線刻五輪塔の盛行の後、同地区から十三浜・長面浦にかけて14世紀中頃～15世紀に一定数の大日如来



第54図 如来応永20年板碑オルソフォト

<sup>(9)</sup> 川勝政太郎『梵字講話』1980 河原書店

<sup>(10)</sup> 勝倉元吉郎『桃生・山内氏と板碑』1999 桃生町教育委員会

<sup>(11)</sup> 『海蔵庵板碑群』1999 宮城県教育委員会

真言系板碑の分布がある<sup>(12)</sup>。松葉板碑群の事例はその中に位置づけられ、その初期にあたると考えられる。五大虚空蔵真言の主尊である五大虚空蔵菩薩は「増益や息災の祈りに用いられるが、特に天変地異を除く祈祷にこの法を修する」とある<sup>(13)</sup>が、その真言は南北朝期の板碑にはあまり用いられないようである。あるいは金門鳥敏法という「辛酉年の除災修法」の本尊とされる<sup>(14)</sup>ことから、将来的に本板碑の紀年銘断片が発見されて、蝦夷蜂起後の元亨元年辛酉（1321）<sup>(15)</sup>、鎌倉幕府が滅ぶ正慶二年癸酉（1333）、戦没者の慰霊塔計画の正式名称が「安国寺・利生塔」と定まった貞和元年乙酉（1345）などであれば金門鳥敏法にかかわる可能性があるかもしれない。しかし、まずは、塔を立てることによって仏を供養し、故人・造立者の極楽往生を祈願するという板碑（石塔婆）の目的に沿って検討していくこととする。「帰命する」意のオンを除いた「バンウンタラクキリクアク」は、金剛界五仏を配した金剛界成身会曼荼羅板碑として、宮城県内に10基あるとされている<sup>(16)</sup>。鎌倉時代の新義真言宗の僧頼瑜（1226～1304）の『祕鈔問答』においては五大虚空蔵法が詳述されており、「祕鈔問答「此所文意如何 答。此五大虚空蔵法歟。五智如来入寶部三摩地云五大虚空蔵歟。五大虚空蔵種子。即五佛種子故。」（SAT）と金剛界五智如来が各々宝部の三昧に入った相が五大虚空蔵であり、金剛界五仏の变化身であることを示している<sup>(17)</sup>。ここでは、「オンバンウンタラクキリクアク」と「オンアビラウンケン」が失われた種子の仏（大日如来もしくは変化身）を讃嘆する偈と同等の位置付けと考える。真言宗僧の常喜院・心覚（1117-1180/82）にかかわる『常喜院流大事（伝流）』には「授与伝法灌頂印可事」として「胎界 内外五股印 満足一切智々五字明 帰命ア・ビ・ラ・ウン・ケン」「金界 大率都婆印 五智種 帰命バン・ウン・タラク・キリク・アク 金剛名号 遍照金剛（以下略）と記されている<sup>(18)</sup>。「五字明」は胎蔵界大日真言、「五智種」は金剛界五仏の真言の意であり<sup>(19)</sup>、いずれも「帰命」が真言の冒頭にある点でも本板碑例に共通している。常喜院流は東密と台密を兼ね合わせた事相の派<sup>(20)</sup>であり、日本密教にお

<sup>(12)</sup> 『北上川下流域のいしぶみ』1994 宮城県桃生郡河北地区教育委員会 『石巻の歴史8』1999 石巻市『牡鹿町史』2005 牡鹿町 『雄勝町の歴史』2004 雄勝町

<sup>(13)</sup> 田村隆照「五大虚空蔵菩薩」真鍋俊照『日本仏像事典』2004 吉川弘文館

<sup>(14)</sup> 『真言・梵字の基礎知識』1993 大法輪閣

<sup>(15)</sup> 「レファレンス共同データベース」HPによると『鶴岡社務記録』元亨元年（1321）の項に、「依辛酉、於當社御修法、正月、二階堂別當僧正親玄金門鳥敏法」とある。学問空間 HP の鈴木小太郎氏によると永福寺別當親玄（1249-1322）が金門鳥敏法（五大虚空蔵法）の修法を行ったと理解されており、本板碑とほぼ同時代の事象として留意される。また、真言僧が除災のために修するのを例としたとされ注目される（坂口太郎「東京大学史料編纂所蔵『五大虚空蔵法記』について—後醍醐天皇と後宇多院法流—」『古文書研究72』2011）

<sup>(16)</sup> 佐藤正人「松島町の板碑」『松島町史 資料編1』1989 松島町

<sup>(17)</sup> 「五大虚空蔵曼荼羅」『新版 仏教考古学講座 第4巻 仏像』1976 雄山閣出版

<sup>(18)</sup> 田中 悠文、金森 勉「勸学会共同研究助成報告 常喜院・心覚の教学について：中世・真言教学研究のための基礎作業」『智山学報45巻』1996 中世真言教学研究会

<sup>(19)</sup> 石田瑞麿『例文仏教語大辞典』1997 小学館

<sup>(20)</sup> 平井宥慶「心覚」小学館 日本大百科全書（ニッポニカ）



女川町・松葉板碑群の現況と予察

番号	所在	名称	紀年銘	西暦	主尊	真言	銘文
1	女川町 御前浜	松葉	不明	不明	不明	オンバンウンタラクキリクアク (右) オンアピラウンケン (左) と推定	右志者(為) 〇〇〇〇 西(出) 離生死往生極(楽) 〇也
2	石巻市 三輪田	旧分教場	正和4	1315	バイ	オンアピラウンケン	正和四 五月廿一日逝去
3	々尾崎	海蔵庵	貞和4年	1348	ア	アピラウンケン (左右配置)	貞和二年〇月日施主敬白
4	々尾崎	海蔵庵	貞和5年	1349	サク?	アピラウンケン (左右配置)	貞和五年乙巳二月日施主敬白
5	々高木	高木観音堂	応安8年	1375	バン	アピラウンケン (右端) アバンランカンケン (左端)	応安八年十月十九日 施主敬白
6	々皿貝	お伊勢山	明徳3年	1392	バン	アピラウンケン (左右配置)	仙(心)明徳三年壬申十三年
7	々吉野町	多福院	応永7年	1400	タラーク	キャンウンラピア/バンウンタラクキリクアク/キャンカンランバン	右志者為 応永(七月六月日) 悲母幽儀併(三廻之忌景)/乃至法界衆(生平等利益也)
8	々吉野町	多福院	応永9年	1402	キリーク	[種子の周開] オンマカーソキャバザラサトバジャクウンバンコクソラダサトバン [五秘密真言]	応(永九)年壬〇十月廿二日 [右から] 右志趣者相当道吉/禪門七分全得/得成此惠業/乃至法界平等利益 施主敬白
9	々十三浜	根古	応永10年	1403	カ	アウンポローン (左右配置)	応永十年(欠損)
10	々十三浜	長塩谷	応永10年	1403	バン	キャカラバア/キャクカクラクバクアク/ケンカンランバクアン/キャカーラーバーアー(いわゆる「四門の梵字」)	
11	々十三浜	長塩谷	応永12年	1405	サ	キャカラバア/キャカーラーバーアー/キャクカクラクバクアク/ケンカンランバクアン(いわゆる「四門の梵字」)	右志為西願禪門応永十二年十月三日/敬白
12	々桃浦	朴長	応永15年	1408	不明三尊 + ナミアムダブツ	キャカラバア/キャカーラーバーアー/キャンカンランバン/キャクカクラクバクアク(いわゆる「四門の梵字」)	右意趣者〇証元又各々志故也 応永十五一結衆等 敬白 道玄 妙金 祐円 〇〇 宗有/〇〇 〇〇 道善 傳阿 嬰清/妙善 妙泉 浄一 道清 道仙/〇善 道斎 道光 〇泉/道善(明)永 妙速 〇〇 妙祐
13	々皿貝	お伊勢山	応永17年	1410	キリーク	アピラ (右) ウンケン (左)	応永十七年八月廿四日
14	々十三浜	小泊	応永17年	1410	サ	アバンポローン (左右配置)	応永十七年庚寅三月日
15	々十三浜	根古	応永18年	1411	キリーク	アウンポローン (左右配置)	応永十八年三月日
16	々十三浜	長塩谷	応永18年	1411	バーンク	キャカラバア (右) アピラウンケン (左)	右志為応永十八年三月廿一日
17	々十三浜	小泊	応永20年	1413	バン	アラハシャナウ (左右配置)	応永廿年十月日
18	々牛田	如來	応永20年	1413	サ	キャカラバア (左右配置)	右志者為応永廿年四月廿日
19	々十三浜	小泊	応永25年	1418	サク	アウン (右) アバンポローン	応永廿五年十月日
20	々十三浜	相川	応永29年	1422	バン	アラハシャナウ (右端) キャカラバア (左端)	応永廿九年四月日/右志趣者徳性禪尼
21	々十三浜	小泊	応永29年	1422	ウン	アバンポローン (右) アウン (左)	応永廿九年十月日
22	々牛田	如來	応永29年	1422	欠損	バンウンタラクキリクアク (左右配置)	応永二十九年七月廿五日施主敬白 道祐七年忌 進修善根故
23	々十三浜	地福寺	応永30年	1423	バン	キャカラバア (左右配置)	右意趣者妙善禪尼/応永三十年二月日/〇〇三年忌辰
24	々寄磯浜	熊野神社行屋跡	応永33年	1426	アーク	アピラウンケン (右) キャカラバア (左)	右志者為廣永三十三
25	々大原浜	中沢	応永35年	1428	〇〇ク	アピラウンケン (右2) キャカラバア (左2)	正阿弥陀仏三十三年 右志者為廣永三十五天/六月九日孝子
26	々十三浜	おいせ峰	正長2年	1429	サク	アラハシャナウ (右端) キャカラバア (左端)	右意趣者 正長二年七月日 道覚禪門
27	々十三浜	根古	永享4年	1432	バン	キャカラバア (左端)	道性禪門/右意趣者 永享四年二月日
28	々十三浜	おいせ峰	永享5年	1433	タラーク	キャカラバア (左端)	道峻禪門 右意趣者 永享五年月日
29	々牧浜	竹浜道	永享6年	1434	タラーク + 月輪上 にアバラ カキヤ	月輪下に光明真言	右旨趣者永享六年十月廿八日 相当妙〇禪尼第三十二年忌/乃至法界平等利益之故也 孝子敬白
30	々寄磯浜	熊野神社行屋跡	永享7年	1435	キリーク	キャカラバア (中央配置)	栄通大徳/第三年塔/婆/永享七年七月日 施主敬白
31	々十三浜	おいせ峰	永享9年	1437	タラーク	アラハシャナウ (右端) キャカラバア (左端)	妙泉禪尼/永享9年? 四月日
32	々十三浜	おいせ峰	宝徳4年	1452	タラーク	イー・バン・アン/サ・ウン・キリーク・サ・サク・バイ/カーン・バク・マン・アン・カ・ア	善根/願主/妙善/逆修/右意趣者/塔婆/一本奉/造立故也/宝徳二年壬申四月/七日
33	々相野谷	源光寺	康生2年	1456	バイ	アピラウンケン (右端) キャカラバア (左端)	妙光禪尼/康生二年/八月十九日
34	々皿貝	方谷入山	寛正7年	1466	サク	アピラウンケン (右端) キャカラバア (左端)	寛正七年
35	々皿貝	お伊勢山	文明2年	1470	キリーク	アピラウンケン (右端) キャカラバア (左端)	時文明二年/奉右之趣者/道範禪門 施主敬白
36	々大瓜	寺崎	明応10年	1501	サク	ナムアマダブツ	相当妙孝禪尼一周忌/道善〇故也/右志者為/明応十年四月廿六日
37	々雄勝寺	天雄寺	天正10年	1582	記	カキャラバア バン※下に「心佛及び衆生/是〇無差別」	伏以 道楷禪門為也畢意如何施主敬白 依此功力願證 即心成佛/菩提平等利益也
38	々長面	竜谷院	慶長17年	1612	イーアピラウンケン	バクマンアン (△配置)	慶長十七年壬子三月廿六日 嶽山下総
39	々十三浜	小泊	応永	1394-1428	サク	キャカラバア(右)ケンカンランバンアン(左)	右志趣者応永(欠損)
40	々倉埜	老人憩いの家	永享	1429-1441	アーク	オンアラハシャナウ (左右配置)	右永享〇年四月日 〇〇禪尼

※線刻五輪塔除く 集約対象範囲は女川町、石巻市域の紀年銘のみを掲載。文献は『北上川下流域のいしぶみ』『石巻の歴史8』『牡鹿町史』『雄勝町の板碑』

第55図 女川町・石巻市真言系板碑(紀年銘)表

ける伝法時の最重要の真言の組み合わせの一つと考えることができる。本板碑の場合、比較した北上川水系、三陸南部沿岸部の大日如来真言系板碑の中でも碑面構成が種子（推定）の下に五智真言（金剛界五仏）・胎藏大日真言の根幹的な真言で大日如来を讃嘆し、その中に紀年銘、願文を配する点、ランクの高い大型板碑である。極楽往生を願われた人物もしくは造立者は、有力武士と考えられる。造立指導者は密教僧と考えられるがあるいは造立者もしくは故人が密教に帰依した人物であったのかもしれない。

## (2) 一月輪阿弥陀三尊種子と供花・花瓶を刻む板碑について

宮城県内の板碑の中で極めて珍しいものに一つの月輪内に阿弥陀三尊種子を配し、その下部に花をさした花瓶を刻む No. 30 板碑がある。A 平場から脱落したと考えられる板碑でその A 平場には一つの月輪内に阿弥陀三尊種子を配していると推定される No. 23 板碑があり、隣接して倒伏し、月輪のみ見える No. 26 板碑も同様の可能性がある。

一つの月輪内に阿弥陀三尊種子を配する例は管見では石巻市矢本町の願成寺の無紀年銘板碑の例のみである<sup>(21)</sup>。矢本町域は中世には長江氏が領有しているが、長江氏は年次不明であるが、女川付近にも領地があったとされ<sup>(22)</sup>長江氏を通じての何らかの関係があった可能性もある。

次に仏への供養として表現された花瓶・供花についてである。関東では相当数見られる



第56図 板碑 No. 30 左：オルソフォト（反転）  
右：月輪・種子・花瓶拓本



第57図 願成寺一月輪阿弥陀三尊  
種子板碑オルソフォト

<sup>(21)</sup> 『矢本町史』1973 矢本町教育委員会

<sup>(22)</sup> 三宅宗議『照源寺の創建とその時代』1992 照源寺



が、宮城県域では、ごく少数であり、管見では石巻市吉野町多福院弘安六年（1283）銘板碑<sup>(23)</sup>、同桃生町新墾神社元亨二年（1322）銘板碑<sup>(24)</sup>（花瓶は上端のみ残存）、同雄勝町船越八雲神社正中三年（1326）線刻五輪塔板碑<sup>(25)</sup>、大崎市岩出山天王寺阿弥陀三尊像板碑（2基）<sup>(26)</sup>の5例<sup>(27)</sup>及び花瓶を描いた可能性のある石巻市矢本町新山神社弘安五年（1282）銘板碑1<sup>(28)</sup>例を確認しているのみである（第58図参照）。多福院弘安六年（1283）銘板碑はキリク（阿弥陀如来）への供花・供養具として垂字形花瓶（胴部二条線帯）1対で、不鮮明であるが三本茎の蓮華をさしている。雄勝町船越八雲神社正中三年（1326）線刻五輪塔板碑は大日如来の三昧耶形である五大種子を刻んだ五輪塔への供花・供養具としての花瓶は鶴首徳利形で三本茎。中央未敷蓮華、左方は剥落。荘厳を尽くした板碑で各輪にキャカラバア（五大種子）を配した線刻五輪塔の上部を天蓋で荘厳して、さらに全体を殊文二重線帯でくくるといふ幡のモチーフ<sup>(29)</sup>とも共通する頭部平頭で幢形である。大崎市岩出山天王寺阿弥陀三尊来迎図像板碑2基はいずれも一個ずつの花瓶であるが1号板碑は鶴首徳利形、「早来迎」の2号板碑<sup>(30)</sup>の花瓶は締め腰瓶子形の違いがある。後者は胴上部に二条線帯がある点で多福院弘安六年（1283）銘板碑にある垂字形花瓶と共通し、その変化した形である可能性もある。鶴首徳利形の花瓶は船越八雲神社例に近似するも、より最大ふくらみが胴下部にある。二つの板碑は同時期と考えられている<sup>(31)</sup>が、伝統的な来迎図には未



第58図 板碑 No. 30 供花・花瓶部拓本

<sup>(23)</sup> 石巻市『石巻の歴史 8』1992

<sup>(24)</sup> 勝倉元吉郎『桃生・山内氏と板碑』1999

<sup>(25)</sup> 佐藤雄一『雄勝町の板碑』1994

<sup>(26)</sup> 藤沼邦彦、石黒伸一郎「宮城県の阿弥陀来迎図像板碑について」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』1990 今野印刷

<sup>(27)</sup> 多福院弘安六年（1283）銘板碑、大崎市岩出山天王寺の図像板碑については石黒伸一郎氏よりご教示を得たことを謝する。

<sup>(28)</sup> 佐藤雄一「板碑」『矢本町史』1973 矢本町教育委員会

<sup>(29)</sup> 磯野治司「板碑の起源に関する一視点」『石造文化財 3』2011 石造文化財研究所

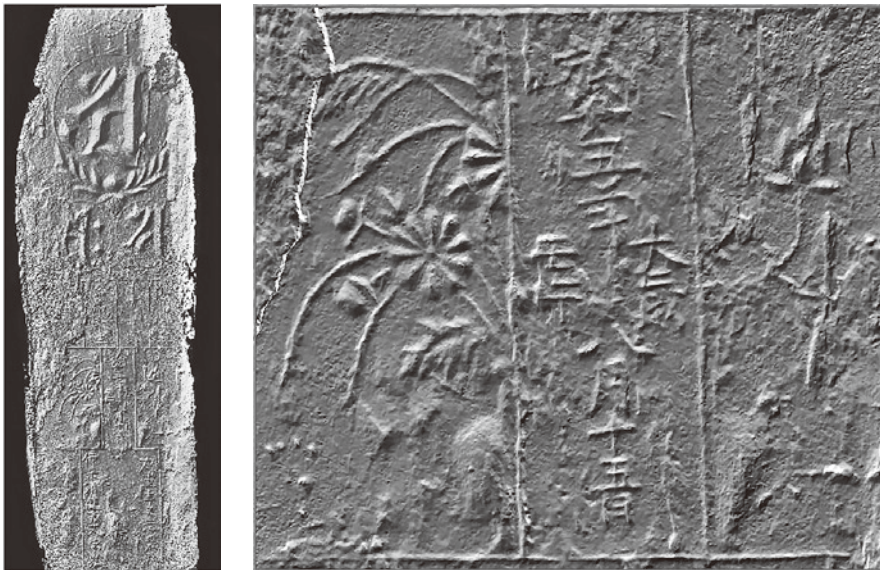
<sup>(30)</sup> 村田和義「宮城県下の図像板碑」『歴史考古学 第26号』1990 歴史考古学研究会

<sup>(31)</sup> 藤沼邦彦、石黒伸一郎「宮城県の阿弥陀来迎図像板碑について」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』1990 今野印刷

敷蓮華をさした徳利型花瓶、鎌倉時代に流行した斜め構図の「早来迎図」には満開の蓮華をさした皿字形の花瓶と意識的に描き分けられているのであろうか。

次に松葉板碑群のNo. 30 板碑であるが阿弥陀三尊種子の下に一個の締め腰形の瓶子形の花瓶が描かれている。天王寺阿弥陀三尊像2号板碑の花瓶に近似するが肩が丸くなっている点に違いがある。これを後出的要素とすれば二基の天王寺阿弥陀三尊像板碑は14世紀前葉ころとされているのでそれより下ることとなるが、瓶子としてはリアルな描きであり、年代は大きく下げられない。口が欠損しているとするれば14世紀代の古瀬戸瓶子をまねたとしてもおかしくはない。花は瓶子形花瓶の真上に三弁状に見えるが、剥落が激しいのでその左右にも存在するかも含めて不明である。本板碑の阿弥陀三尊種子は、前傾しており、剥落のせいもあるだろうが、葉研彫り本来の力強さを失っているようにみえる。No. 30 板碑の原位置と推定される斜面上方のA群には、いずれも剥落が進行しており紀年銘は確認されないものの倒伏している板碑に建武三年(1336) 銘のNo. 24 板碑があり、このA群の上限が元亨元年(1321)であること、また、銘文の簡略化が進んだ南北朝期後半のものとは碑面構成が異なっている点と花瓶の年代観を考慮して14世紀前葉から中葉頃の板碑と考えておきたい。

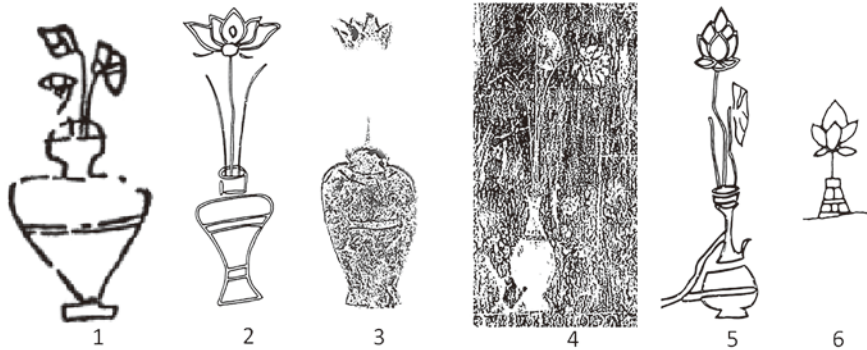
なお、剥落摩滅もあり、花瓶は明瞭ではないものの、秋草と蓮華を表現したとみられる板碑が前述した石巻市矢本町の願成寺の北方約3.8kmの新山神社にある。弘安五年(1282) 銘でア(胎藏界大日如来・諸仏の通種子)を主尊としサ(観音菩薩)、サク(勢至菩薩)を脇侍とする特異な種子構成で、天蓋と各蓮座で荘厳する。その下に観無量寿経の「光明遍照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨」の偈(観無量寿経)を配する。花瓶の形は判然と



第59図 新山神社弘安五年銘板碑オルソフォト(反転) 左:主要部 右:供花・紀年銘部



しないが、くぼみとして造形され、紀年銘の左に締め腰瓶子左半分形から菊花と薄？、右に右半分の瓶子形から蓮華が出ているように見える（第58図オルソフォト参照）。その下



花瓶の3タイプ 亜字形(1)、瓶子形(2,3)、徳利形(4,5;6)

1石巻市吉野町多福院弘安六年(1283)銘板碑(『石巻の歴史8』図) 2大崎市岩出山天王寺阿弥陀三尊来迎図2号板碑(藤沼・石黒「宮城県のア弥陀来迎図像板碑について」) 3女川町松葉板碑群30号板碑(田中拓本より抽出) 4石巻市雄勝町船越八雲神社正中三年(1326)線刻五輪塔板碑(佐藤雄一『雄勝町の板碑』) 5大崎市岩出山天王寺阿弥陀三尊来迎図1号板碑(2に同じ) 6桃生町新墾神社元亨二年(1322)板碑(勝倉元吉郎『桃生・山内氏と板碑』)

番号	所在	紀年銘	花瓶	花
1	石巻市吉野町多福院 (上図1)	弘安六年 (1283)	亜字形。広がった口縁部から首がすぼまり肩が張り下部すぼまり底部は広がる。胴部上半に二条線 1対2個	三本茎 蓮華
2	石巻市桃生町新墾神社 (上図6)	元亨二年 (1322)	広がった口縁部、細首からしだいに胴部膨らむが下方欠損 1個	一本茎 蓮華
3	石巻市雄勝町船越 八雲神社	正中三年 (1326)	鶴首徳利形A。末広がりの高台が付く。上部に二条線。1対だが1個欠損	三本茎 蓮華 (中央未敷蓮華)
4	大崎市岩出山天王寺 阿弥陀三尊像1号板碑 (上図5)	不明 (1322年ごろ)	鶴首徳利形B。肥厚する口縁部にAより膨らむ胴下部。末広がりの高台が付く。上部に二条線。带状の二条線が二か所。	三本茎 中央に蓮華 左右に葉
5	同天王寺 阿弥陀三尊像2号板碑 (上図2)	不明 (1322年後頃)	締め腰瓶子形。胴上部と下部に二条線帯	三本茎 中央に蓮華
6	女川町松葉板碑群 No. 30 板碑 (上図3)	不明	締め腰瓶子形。口縁下部と胴中央部に二条線帯	三本茎? 中央に蓮華
7	石巻市矢本町新山神社	弘安五年 (1282)	紀年銘の右側に瓶子形半分、左側に締め腰瓶子形半部分を凹みとして表現している可能性	右に蓮華、左に菊花、薄か

※2は佐藤雄一『雄勝町の板碑』1994では年不詳とするも中村光一「宮城県北部の板碑天蓋」『石巻文化センター調査研究報告』1993による。

4、5の年代は藤沼邦彦・石黒伸一郎「宮城県のア弥陀来迎図像板碑について」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論放』1990の堂前図像板碑の元亨二年(1322)に近いとする年代観から

第60図 宮城県域の板碑にみられる花瓶(上図:類型 下表:年代順)

に願文には「右造立之志者為先考幽霊 仏果精進兼又法界平等故也」<sup>(32)</sup>「大施主 平景氏 敬白」とあり、造立者は長江氏が推定されている<sup>(33)</sup>。長江氏は相模国御家人の長江氏が奥州合戦の恩賞として深谷保を獲得したと考えられており、この新山神社の一带はその供養の場と考えられている<sup>(34)</sup>。長江氏は本板碑の北方約3.8 kmの石巻市北村の弘安元年(1278)銘板碑に刻まれるように鎌倉権五郎景正(1083~1087年)の血統を誇る有力武士であった。

以上のように宮城県域の板碑における花瓶・供花の表出は13世紀後葉から14世紀中葉頃にかけて認められ、極めて少数であったが、密教法具である壺字形の器形<sup>(35)</sup>の花瓶が当初からあり、鎌倉末期から南北朝期には徳利形が見られる。本板碑群 No. 30 板碑の花瓶と同一のものは確認できなかったが、天王寺2号板碑花瓶形の流れである可能性があるが、より締め腰の瓶子を写實的に描いている。関東地方と比較すると栃木県に本例とやや近い例が認められた。『田沼町史』<sup>(36)</sup>を参照すると、南北朝期から室町期にかけて近似する例があり、斎藤弘氏の板碑編年<sup>(37)</sup>では瓶子形は14世紀中葉から15世紀後葉に存在する。また、亀田浩子氏の紹介する諸例<sup>(38)</sup>を参照すると南北朝期のものにやや近似するが本板碑例はよりリアルな締め腰の瓶子形となっている点で在地武士団の宗教的環境や暮らし(古瀬戸瓶子の所有や仏器への転用)が反映されている可能性がある。

## 8 ま と め

松葉板碑群は御前湾に突き出す丘陵突端に鎌倉末期から南北朝期に形成された約50基(発掘調査+現況調査)の板碑から成る武士団の供養所・墓所の遺跡と考えられる。震災復興の事前分布調査で発見された遺跡だが、それ以前の女川町域の板碑総数が62基であるので、女川町域最大の板碑群ということになる。東日本大震災津波で失われた針浜安住の阿弥陀三尊来迎図像板碑(延慶二年1309)や震災後、「いのちの石碑」のモデルになったと思われる女川町最古碑建治二年(1276)銘板碑など針浜の板碑群は万石浦を中心とした仏教文化を示すものとして従来から知られていたが、発掘調査と今回の現況調査により御前湾にも在地武士団の拠点を背景とした仏教文化が開いていたことが判明した。

板碑の仏尊を表す種子は、アーク(胎藏界大日如来)1・ア2(胎藏界大日如来)、バン4(金剛界大日如来)、キリーク2(阿弥陀如来)、キリーク・サ・サク2(阿弥陀三尊)、

<sup>(32)</sup> 願文の読みについては野口達郎氏の教示をいただいたことを謝する。

<sup>(33)</sup> 『矢本町史』1973 矢本町教育委員会

<sup>(34)</sup> 七海雅人「関東御家人の東北移住」『鎌倉幕府と東北』2015 吉川弘文館

<sup>(35)</sup> 岡崎譲治「密教法具」『新版 仏教考古学講座 第5巻』1976 雄山閣出版

<sup>(36)</sup> 「供養碑塔の建立」『田沼町史 第6巻』1985 田沼町

<sup>(37)</sup> 斎藤弘「下野の板碑」『板碑の考古学』2016 高志書院

<sup>(38)</sup> 亀田浩子「佐野市立塚小学校所蔵の板碑について—佐野市内における種子・蓮座・花瓶の変遷—」『唐澤考古30』2011 唐沢考古会



カ2（地蔵菩薩）、ウン、1（阿闍如来ほか）、バク1（釈迦如来）であり、ア・バンの胎蔵・金剛界大日如来の二尊種子板碑も1例ある。全体としては密教浄土教的傾向が強い。アークの永仁五年碑以外の大部分は14世紀に入るので十三仏信仰の回忌本尊と対応している可能性があるが、銘文との関係では、「七年忌塔婆」の応安六年（1373）銘板碑の種子はウン（阿闍如来）ではなくキリーク（阿弥陀如来）であり、十三浜などで多用されるサ（観音菩薩）、サク（勢至菩薩）の種子が確認されないので、十三仏信仰は徹底されていない。

真言については、前述したNo. 10、11板碑（同一個体とみる）の「オンバンウンタラクキリクアク」（五大虚空蔵真言・金剛界五仏真言）、「オンアビラウンケン」（大日報真言・胎蔵大日真言）のみであるが、本板碑群の密教的要素に相当するとともに一般的な板碑の真言の組み合わせにはない胎蔵真言・金剛界真言（あるいは五大虚空蔵法）として注目される。

銘文については、ほとんどの板碑の碑面が剥落している中で10基の板碑で確認された。願文の内容がわかるものは8基、そのほぼ全文を把握できるのは5基で二つのパターンがある。第一は「往生極楽」のフレーズを入れるもの、第二は「七年忌塔婆」、「三年奉相当忌辰」と回忌年を入れるもので、両者は混用されており、第二のパターンは2基のみで最上部のD平場の次に高いC平場に限定されている。時期的には両者は分離できないので、あるいは別々の造立グループの造立の可能性がある。ただし、いずれも1370年代の板碑であり、十三仏信仰の回忌本尊は定着していないものの、それに至る十仏信仰が広まりつつことを反映していることは、造立の目的より年忌供養であることを優先して願文としていることに表れていると考える。第一のパターンではほぼ願文全体が分かるものとしてNo. 24（A群）建武三年（1336）銘板碑があり「右志者為過去聖霊/出離生死往生極楽也」とある。この願文フレーズは板碑に限らず故人の往生極楽を願う石塔、例えば山口県防府市の貞永元年（1232）銘笠塔婆の曼荼羅下に「右志者為過去尊霊刑卍子中 未時逝去為出離生死往生極楽也」とある。そして、追善供養の石塔婆である板碑造立開始初期からの基本パターンであることは、著名な仁治元年（1240）銘群馬県前橋市の小島田の阿弥陀三尊板碑の「右志者為過去子息小兒幽霊出離生死往生極楽証大菩提也 仁治元年十二月十七日、橋清重敬白」<sup>(39)</sup>はもとより、近辺では石巻市永巖寺の建治元年（1275）銘板碑に「右志者為過去尊高、聖霊相当一百ヶ日忌景 出離生死往生極楽 乃至法界無差平也」の願文に明らかである。さらに古川市天寿庵の弘安二年（1279）銘板碑には「右志者為過去聖霊出離生死往生極楽証大菩提也」、石巻市水沼の弘安六年（1283）銘板碑に「右志者為過去慈父聖霊」、「出離生死往生極楽故也」と刻まれているように宮城県においても13世紀後半期の願文の充実した板碑では「右志者為過去○○ 出離生死往生極楽」が基本フレーズ

<sup>(39)</sup> 防府市笠塔婆例、小島田の板碑例は、「石造品銘文集（1）」『歴史考古学 第22号』1988 歴史考古学研究会

の一つとなっている。また、戒名を確認できたのは No. 8 永和三年（1377）碑の「妙阿禅 □」のみである。南北朝期には「妙」は女性が多いが断定できない。戒名を表す板碑は南三陸沿岸においても南三陸町戸倉神社延文四年（1359）銘「円□禅尼」など南北朝期に増加する傾向に合致している。全体としては密教浄土教の思想で造立されていると考えられ、検討した金剛界五仏真言・胎藏真言板碑は密教、A 平場における 14 世紀前・中葉と考えられる一月輪阿弥陀三尊種子板碑は浄土教色を代表している。

平場とその変遷については A～D 平場の順番で変遷していく傾向は報告書で指摘された通りである。D 平場が発掘調査で実証されたように板碑造立のために造成されたと考えられるが、鎌倉末期に開始される A 群のように 3×1.5 m ほどの平場に少なくとも 19 基の板碑が集中していることは、一族ごとの場が固定されていた可能性もあり、棟梁一族とその他のグループの区画を意識した武士団の墓所・供養所の可能性も考えられる。

近隣の板碑群との比較においては石巻市尾崎宮下、長面浦に所在する海蔵庵板碑群<sup>(40)</sup>が最大規模（板碑 159 基）であるが、松葉板碑群はこれに次ぐ十三浜の長塩谷（96 基）・小泊（76 基）板碑群と同様の規模であり、海を臨む斜面に平場を造成して板碑を造立している点で三者に近似し、海蔵庵・長塩谷・小泊板碑群が室町期まで盛行するのに対し、紀年名でみる限り南北朝期末で衰退している点に大きな違いがある。

最後に本板碑群では No. 19 のみ地上高 21 cm、幅 16 cm と小型である（上部が折れた可能性もあるが）。本板碑群の斜面下半部には近世墓群が営まれており、本板碑群の発見時にはほとんどが裾部に散乱し、顔だけ出して埋もれているものもあった。近世墓石材のほ



第 61 図 小型板碑の可能性あるものと B 平場（オルソフォト）

<sup>(40)</sup> 『海蔵庵板碑群』1999 宮城県教育委員会



女川町・松葉板碑群の現況と予察

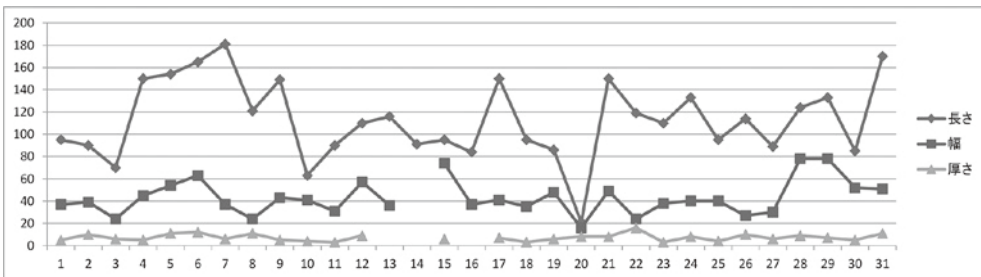
番号	本文番号	群	主尊	紀年銘	確認状況	形状	長さ	幅	高さ	銘文	傷・真言、 莊嚴
1	13	Ba	アーンク (胎藏界大日如来)	永仁五年 (1297)	立位 (斜位)	頭部は偏アーチ形、 板状	103	45	10	「永仁五年/聖靈」	
2	27	A	ウーン (阿闍如来等)	元亨元年 (1321)	横位 碑面剥落多	頭部不整ドーム形	95	37	5	不明	
3	24	A	バン (金剛界大日如来)	建武三年 (1336 北朝)	倒伏 碑面保存良好	頭部平坦に整形 側面直線	90	39	10	「右志者为過去聖靈/ 建武三年四月日敬白/ 出離生死往生極樂也」	
4	4	C	カ (地藏菩薩)	応安二年 (1369 北朝)	立位	頭部さんかく不整 アーチ形	37	16.5	6.5	「右為応安二年」	
5	5	C	キリーク (阿弥陀如来)	応安六年 (1373 北朝)	横位	頭部平坦、側面垂直 ほぼ平行	70	23.5	6	「右志者为過去靈/ 應安六年卯月/七年 忌塔婆故也 敬白」	
6	8	Cb	不明	永和三年 (1377 北朝)	横位、(剥落顯著・ 銘文の上下欠損)	板状	150	44.3	4.5	「右志者妙阿禪 <sup>〇</sup> / 永 和三年十一月日/三 年奉相當忌辰」	
7	15	Bb	バン (金剛界大日如来)	康暦元年 (1379 北朝)	横位 (斜面)	不整長方形	154	53.5	10.5	「右志者/ 康暦元年 未已/出離生死」	
8	20	Ab	バク (釈迦如来)	不明	横位	頭部不整ドーム形、 全体は弧状	165	63	11.5	「右志者/ 過去慈父/ 幽靈往生/極樂也」	
9	21	Ab	不明	不明	倒伏	板状	181	37	5.5	不明	
10	22	A	不明	不明	倒伏 側面露出	頭部破損	76	19~	7	不明	
11	23	A	月輪内に阿弥陀三 尊種子か	不明	倒伏 碑面は下面	頭部破損 板状	83~	36.5	9	不明	月輪
12	25	A	不明	不明	倒伏 (斜面)、ほぼ 完形、表裏不明	尖頭形	121	24	10.5	不明	
13	26	A	不明	不明	横位 (斜面)、頭部 破損 碑面剥落多	不明	78~	49	6.5	不明	月輪
14	28	A	不明	不明	基部	不明	51~	20.0+ 21.0	10	不明	
15	29	A	不明	不明	倒伏板碑群最下部 碑面剥落多	不明	69~	34	21.5	「往生極樂也」	
16	30	Ab	阿弥陀三尊種子	不明	横位 碑面剥落多	頭部平坦 地上部板 状	149	42.5	5	不明	月輪 花瓶1 (花の一部残 存)
17	31	Ab	不明	不明	横位 (斜面) 表裏不明	板状	115~	61	13	不明	
18	32	A	不明	不明	横位 (斜面) 表裏不明	不明	63	41	3.4	不明	
19	33	A	不明	不明	倒伏 (斜面)	不明	76~	13.5	7.5	不明	
20	34	A	不明	不明	倒伏 (斜面)	板状	90	31	2.5	不明	
21	35	A	不明	不明	倒伏 (斜面)	板状	43~	27	3.5	不明	
22	37	A	不明	不明	立位・倒伏 (基部)	不明	33~	31	2	不明	
23	38	A	不明	不明	倒伏 (基部)	不明	26~	62	5	不明	
25	6	C	不明	不明	斜位 (碑面大部分剥 落)	頭部は偏三角形	110	57	8.5	最下辺に「敬白」「八 日」左端に「〇〇〇〇」	
26	7	C	不明	不明	立位、(全面剥落)	尖塔形	101	34.5	12	不明	
27	9	Cb	不明	不明	横位 ほぼ完形か 表面のみ露出	不整楕円形	116	36	不明	不明	
28	42	Cb	不明	不明	横位 表裏不明	不明	36~	40~	1	不明	
29	10	Ba	不明	不明	立位	形態不明、接合しな いか形状、碑面構成 から同一個体	103	26	29	「右志者 (為) 〇〇〇〇」	オンバンウン タラクキク アク
30	11	Ba	不明	不明	横位		91	26~	7.5	「酉/(出) 離生死往 生極 (樂) 〇也」	オンアピラウ ンケン
31	12	B	不明	不明	横位	不整長方形	94.5	74	5.5	不明	
32	14	Bb	不明	不明	横位 (斜面)	不整長方形	83.5	37	5~	不明	
33	16	Bb	キリーク (阿弥陀如来)	不明	横位 (斜面)	尖頭形 弧状	150	41	7	不明	
34	17	Bb	不明	不明	横位 (斜面)	尖頭形 不整楕円形	95	35	2.5	不明	

第 62 図 松葉板碑群板碑表

番号	本文番号	群	主尊	紀年銘	確認状況	形状	長さ	幅	厚さ	銘文	傷・真言、 莊嚴
35	18	Bb	不明	不明	横位(斜面)	不明	86	48	6	不明	
36	19	Ba	不明	不明	立位	頭部平坦、板状	21	16	7.5	不明	
37	36	B	不明	不明	立位(基部)	不明	8~	20	2	不明	
38	39	B	不明	不明	横位 表裏不明	不明	15~	22~	2.5	不明	
39	40	B	不明	不明	横位 表裏不明	不明	32~	11~	不明	不明	
40	41	B	不明	不明	横位 表裏不明	不明	25~	22~	4.8	不明	
41	1	D	ア(胎藏界大日如来) バン(金剛界大日如来) 二尊縦位(薬研彫)	不明	立位、ほぼ完形	板状	150	49	8	不明	
42	2	D	不明	不明	立位 剥落顕著 ほぼ完形	尖頭状	119	24	16	不明	
43	3	D	不明	不明	立位 剥落顕著 欠損		110	38	3	不明	
44		D	ア(胎藏界大日如来)	不明	出土 ほぼ完形		133	40	8	不明	
45		D	カ(地藏菩薩) (薬研彫)	不明	出土 ほぼ完形	頭部偏三角形	95	40	4	「右志者为過去/極」	
46		D	バン(金剛界大日如来) (薬研彫)	不明	出土 ほぼ完形	頭部偏三角形	114	27	10	不明	
47		D	不明	不明	出土		89	30	6	不明	
48		D	不明	不明	出土		124	78	9	不明	
49		D	不明	不明	出土		133	78	7	不明	
50		D	不明	不明	出土		85	52	5	不明	
51		D	不明	不明	出土		170	51	11	不明	

※ 41~51 は女川町調査 (2016) の D 群 42 は報告書では種子丸彫りとする。43 は据え方に台石・接合 (旧 No.3)

第 62 図 松葉板碑群板碑表 (発掘調査分を含む) (つづき)



第 63 図 松葉板碑群法量 (全長完形のみ)

とんどは砂岩であり本板碑群の石材は粘板岩であることから両者の区別は容易と思われたが、立位のもので判別に悩んだものがある。仮 No. 54 (確認長さ 19 cm 確認幅 13 cm 確認厚 4.4 cm) は、No. 11 の西方約 2 m の木の根に埋まっているのを補足調査の最終日に確認した。石材は粘板岩とみられ、海側は平坦で平滑研磨されているようであるが種子などは確認できず、根の中に入った部分に銘文が残っていたり、本来は墨書などがされていた可能性はあるが板碑とは認定できなかった。ただし、石材は近似しているため板碑の可能性はある。仮 No. 55 (地上高 43 cm 幅 19 cm 厚さ 12 cm) は近世墓に関わる土台状の石が集中的に残存している場所で No. 12 の東方約 1 m に立っている。当初、種子状にみえたものは変色



判断し、石材も近世墓石と同様なので板碑とすることは保留とした。なお、粘板岩の断片には小形板碑風のものもあったが、風化痕跡の認められないものは板碑として認定していない（第8図b参照）。小型板碑の有無は本板碑群が15世紀に及ぶかどうかに関わる指標として課題である。

## 9 予 察

現地では現況調査のための清掃においていくつもの板碑の可能性のある石も顔を出しており板碑総数は50基以上と推定される。女川町域最多の板碑群であり、松葉板碑群が東日本大震災を契機に発見されたことに感銘を禁じ得ない。従来62基が確認されていた<sup>(41)</sup>中で針浜地区の17基が最多であったので松葉板碑群の規模は際立っている。しかも後述するように鎌倉後期から南北朝期に集中しているのが特徴である。金剛界五仏真言と胎藏真言と稀に見る達筆の願文にみる密教的大型板碑、一月輪阿弥陀三尊種子に供花する板碑にみる浄土教的要素といった高度の仏教文化は鎌倉後期から南北朝期における御前湾を拠点とする武士団が産み出したものであり、御前浜を見下ろす岬から発見された宮城県出土銭最多の一万枚を超える14世紀の埋蔵銭にみられる財力に支えられていたと考えられる<sup>(42)</sup>。従来の調査成果に基づいた万石浦を中心に花開いた板碑文化という評価は、松葉板碑群の発見によって、板碑造立の初発は石巻湾に近い針浜周辺であったものの、鎌倉末期から南北朝期にかけての一大中心地が御前浜にあったことが判明した。鎌倉後期から南北朝時代の御前浜は武士団が一带を領有して、海産物とその交易などにより活発な活動を行っていたと考えられる。荒唐無稽に聞こえる百済王敬福伝説の淵源の一端はここにあらう。そして室町期に入ると近隣の桐ヶ崎板碑群と同様、板碑造立が途絶することは女川の



第64図 現況パノラマ（2016年12月） 下段中央部に永仁五年碑、上段は新国道（発掘調査地）

<sup>(41)</sup> 佐藤雄一『女川町の板碑』2001 女川町教育委員会

<sup>(42)</sup> 銭の枚数は10572枚 最新銭は至大通宝（初鑄年1310年）藤沼邦彦・神宮寺千恵「宮城県における一括出土の渡来銭」『東北歴史資料館 第18巻』（1992 東北歴史資料館）では年代を14世紀後半。最新銭が至大通宝である時期については鈴木公雄『出土銭貨の研究』1999では14世紀第2～第3四半期とする。

他地域との大きな違いであり、政治的変動を検討していく必要がある。原因となる一つの可能性としては室町期まで造立を続けた針浜に比較すれば街道との接続が弱く、葛西氏期の拠点との流通において拡大を図ることが困難であったことによるのかもしれない。後述する千葉大王の王子と配下のものたちが雄勝湾に移動していく伝承は、雄勝の地が北上川（追波川）河口、長面浦に水陸とも通じる要衝であることから不自然ではない。

本板碑群の最古の板碑は下段のほぼ中央部に立つ鎌倉時代後期の永仁五年（1297年）銘板碑である。報告書で述べているように女川町域の紀年銘で知られる板碑造立は石巻湾の北東に深く入り込む万石浦の東岸、針浜板碑群の建治二年（1276）、次いで北東岸の大沢安住板碑群の弘安七年（1284）、次いで女川湾の桐ヶ崎板碑群の正応六年（1293）、そして松葉板碑群の永仁五年（1297）と展開している。万石浦北西岸の沼津越田の初発板碑が弘安元年（1278）であり、西側から順序良く板碑造立の風習が伝播するわけではない御前浜への板碑造立習俗の波及は基本的には石巻市多福院板碑群の建治元年（1275）初発にはじまる石巻湾岸からの武士団の根拠地である入り江ごとに営まれた連鎖状の「南三陸海岸部板碑群」形成の一環に位置付けられると考える。今回の松葉板碑群の発見は南三陸町細浦に至る連鎖状の「南三陸海岸部板碑群」のミッシングリンクがつながったことになる<sup>(43)</sup>。大づかみに捉えれば石巻湾から湾岸沿いに板碑群の形成は北上していくのであるが、けっして順序良く北上するのではなく、ある地域単位のいくつもの入り江の中から一つが選ばれる。それは漁業圏のまとまりや街道との接点などの経済的利点の大きいところに海民的武士団の成長があり、それとともに板碑造立習俗が採用されることとなる。ただし、採用後、一気に板碑群形成が始まるわけではなく、14世紀に入ってから、とりわけ南北朝期に加速的に形成されていると考えている。それは一大霊場化していく松島雄島のからの再度の波があったのではないだろうか。その段階が南三陸沿岸の「在地霊場」の成立と考えている。そしてこのような動きは海岸線だけの動きだけではなく北上川水系の武士団の動きや文化と連動しつつ、総じて独自の仏教文化を開花させていったのではないかと考えている。今まで宮城県史や東北南部の通史では柱として取り上げられることのなかった三陸南部の中世史が岩手県側の研究とリンクして東北史における三陸の中世史の重要性が評価されていくことが期待される<sup>(44)</sup>。

<sup>(43)</sup> 田中則和「南三陸町域における板碑・城館の概要」『宮城考古学 第19号』2017 宮城県考古学会 同「南三陸町壇の上板碑群―室町期の「万法一如」偈板碑―」

『東北学院大学東北文化研究所紀要49』2017 東北学院大学東北文化研究所

<sup>(44)</sup> 石川日出志「気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究」（2014-04-01-2017-03-31）では毎年度市民報告会が開催されていることも高く評価される。



## 10 終わりに ― 伝承と課題

御前浜の南隣の浜である尾浦には「千葉大王の王子」に仕えた地元の有力者が千葉王蔵の苗字名を下し置かれたという「尾浦屋敷」伝承があり、江戸時代に書かれた『安永風土記』には尾浦の古称は「千葉大王」に因んだ「王浦」であったと記されている。入間田宣夫氏は前述の御前浜埋蔵銭の主を「遠島の地頭、北条氏の代官か。具体的には安藤氏の一族か、さもなくば、千葉大王の伝説に物語られた在地の有力者か」とし、『安永風土記』で神龜年中天竺釈旦国の千葉大王の王子とするものを、関東の千葉一族が南北朝期に移住してきたことを反映しているとした<sup>(45)</sup>。「千葉大王の王子」はやがて雄勝一帯で活躍したとされるが、私は、御前浜の百済王敬福御所伝承も淵源は同根であり、千葉氏に関わる重要施設が置かれた可能性もあるのではないかと考えている。ただし、松葉板碑群の板碑造立は鎌倉時代後期の永仁五年（1297）には開始されているので前述の南北朝期の移住説とは齟齬をきたすことになる。しかし、石巻市湊にある一皇子神社、弘安六年（1283）「平朝臣胤常」銘板碑の存在から千葉氏は、鎌倉時代後期には湊周辺に來住していると考えられる<sup>(46)</sup>ので鎌倉後期に御前浜に千葉氏一族が入った可能性もある。ただし、松葉板碑群のある地域は、鎌倉期には北条氏領に属していた可能性があることからすると安藤氏等の配下の地元の有力者が南北朝期に至って、移住してきて葛西氏の家臣となっていく千葉氏の配下に属した可能性の方が無難といえる。尾浦の千葉大王の王子から千葉王蔵の苗字名を下し置かれたという伝承はその反映かもしれない。いずれにしても後醍醐天皇の皇子南朝型伝説に彩られた針浜に対して、御前湾一帯を支配した北朝側の武士が姿を現したといえよう。また、御殿峠にあった羽黒社の創建が弘安四年（1281）に牡鹿郡の安藤氏が羽黒山政所から遠島の先達を安堵されていること<sup>(47)</sup>に関わる可能性もあり、鎌倉期の三陸南部への羽黒勢力の伸長を示唆するのであるが、前述したように鎌倉期に御前浜を含む追波川河口の針岡から女川湾北岸の桐ヶ崎までの漁業に関わる祭祀儀式を羽黒派修験が差配しているとして、その空間単位が武士団の支配単位を反映していることも考えられる。

その武士団がだれか、鎌倉期から南北朝期の領有の諸相が今後の研究課題となる。いずれにしても今回の発掘調査と現況調査によって雄勝湾に連なる御前浜に鎌倉末期から南北朝期にかけての板碑群の内容が明らかとなり、その造営主である居館跡も想定されたことは三陸南部中世史を一步進める礎となると考えられる。

石製の塔婆（卒塔婆）である板碑は、宮城県内では約 8,000 基<sup>(48)</sup>に及ぶと考えられるが、

<sup>(45)</sup> 入間田宣夫「鎌倉武士団の入り部」『石巻の歴史 第1巻』1996 石巻市 尾浦の千葉大王伝説については『宮城県の地名』1987（平凡社）同「千葉大王御子の物語によせて」『季刊東北学 27』2011（柏書房）

<sup>(46)</sup> 七海雅人「中世本吉・気仙地域の論点 ― 歴史学の立場から ―（覚書）」『宮城考古学 第19号』2017 宮城県考古学会

<sup>(47)</sup> 大石直正『中世北方の政治と社会』2010 校倉書房

<sup>(48)</sup> 宮城県の板碑総数の概数としては石黒伸一朗「宮城県の板碑分布数」2008『史跡と美術 785』の7,000基に

松葉板碑群のように恐らく700年間も立ったままだった可能性がある板碑を含み、ほとんどの板碑が元の場所から大きくは移動していない板碑群は貴重であり、保存されている例としては東光寺板碑群（仙台市指定史跡）、大門山板碑群（名取市指定史跡）、馬の足塚板碑群（登米市指定史跡）など極めて少数である。鎌倉・南北朝期の女川の地域史を語る記録は、ほとんどなく、板碑は貴重な歴史資料である。松葉板碑群が遺存していることは700年近くにもわたって地元の人々が守り伝えて来たからに他ならない。東日本大震災津波を契機に発見され、地域の歴史を伝える貴重な歴史文化遺産である松葉板碑群が復興まちづくりとともに保護、活用されていくよう祈念する。御前湾を見下ろす高台に住宅が完成し、新国道も完成して復興が少しずつ進展しつつあることは喜ばしい。そして、女川を含め震災を契機として飛躍的に進展しつつある三陸の歴史探求も、リアスの海に生き死にした先人への供養と未来への指針ともなりうるのではないかと考える。

末筆ながら、今回の現況調査にあたっては震災復興を進める厳しい状況の中にもかかわらず、土地所有者の方々、阿部栄喜区長様、平塚英一様、古田和誠様、女川町教育委員会、宮城県教育委員会、地元の皆様、新山神社土井様、天王寺ご住職様、西條由美恵様他多大なご協力をいただいたことを謝する。また、碑文の読みについて七海雅人氏、野口達郎氏、類例・文献について三宅宗議氏、石黒伸一朗氏、齋藤弘氏、石材については永広昌之氏からのご教示を得たことを謝する。

---

加え、松島町雄島周辺海底採集板碑が現時点で新野一浩氏の教示を踏まえれば約1,000基（破片総数3,400点）、田中の南三陸町調査で約100基増加しているの約8,000基とした。